

母乳栄養確立の援助に関する研究

研究協力者 (順天堂大学産科婦人科学教室)

古谷 博

安藤 三郎

国保健太郎

母乳は元来、新生児にとって最良かつ最適の栄養であることはいうまでもないが、一時期、母乳の価値の認識不足、粉乳の発達、簡便性、過信、母乳に含有される化学物質への危惧等によって、母乳哺育に対する積極性が低下した。

しかし、近年に至り新生児に於ける母乳栄養の意義が再認識され、幾多の施設に於いて、母乳栄養確立の試みがなされ、その結果、免疫、感染、精神的な面に於ける、基礎的に重要な事実が指摘され、その優秀性が新しい観点から認められてきた。

そこで私達も、母乳栄養の確立を推進、維持する為には、何と云っても、医師、助産婦、看護婦が一体となって母乳栄養確立の為の授助指導が大切と考え、前年度に引き続き、昭和51年9月以降に出産した褥婦に対して、その授助指導を行なってきた。なお、方法は前回昭和50年10月に行なった調査と同様である。

対象：昭和51年9月より当院にて出産した正常満期産の褥婦40例と、その新生児。

方法：(1)指導要項を作製し、褥婦に母乳栄養の意義を認識させるとともに、指導方法の統一をはかった。

(2)直接授乳量を測定した。

(3)入院中に指導を行ない、退院時並びに1カ月後に栄養法の調査を行なった。

成績：母乳栄養の確立には、退院時点における1回直接授乳量が40mlに達していることに意味がある。これが40ml未満の褥婦は5例で、そのうち母乳のみが2例、混合栄養が3例であったが、40ml以上の褥婦35例では、母乳栄養32例、混合栄養3例で、退院時に既に極めて多くの例で母乳栄養の確立出来ていた。人工栄養は、わずかに1例に過ぎなかった。(表1)

次に、退院時及び1カ月後の栄養法をまとめてみると、退院時点での母乳栄養確立率は、初産婦20例中15例(75%)、経産婦20例中17例(85%)と経産婦に高く、混合栄養は、初産婦4例(20%)、経産婦3例(15%)と初産婦に高い傾向がある。人工栄養は初産婦1例(5%)、経産婦0であった。同

表1 <退院時1回直接授乳量と栄養法>

1回直接授乳量(ml)	数(%)	母乳栄養	混合栄養	人工栄養
0~20	0(0)	0	0	0
20~40	5(12.5)	2	3	0
40~60	17(42.5)	13	3	1
60~80	16(40)	16	0	0
80以上	2(5)	1	1	0
計	40			

一褥婦について、1カ月後に調査してみると、母乳栄養は初産婦で15例(75%)、経産婦で14例(70%)、混合栄養は初産婦で2例(10%)、経産婦で4例(20%)、人工栄養は初産婦で3例(15%)、経産婦で2例(10%)となり、母乳栄養の率は初・経産婦で逆転し、混合栄養は初産婦の方が減少した。(図2)

次に退院時の栄養法について、前回(昭和50年10月)の調査との比較を行なうと、まず初産婦では、母乳栄養は前回8例(66.7%)に対し今回15例(75%)、混合栄養は前回4例(33.3%)に対し今回4例(20%)で、母乳栄養の率が上がっている。又経産婦では、母乳栄養は前回11例(73.3%)に対して今回は17例(85%)で、混合栄養は前回4例(26.7%)に対し、今回は3例(15%)であった。即ち、初・経産ともに、今回は前回よりも退院時点での母乳栄養の確立が進んだことを示している(図3・図4)。

次に退院後1カ月の時点での栄養法の定着率について、前回の調査と比較した。まず初産婦では前回は退院時母乳栄養であった8例のうち、1カ月後に6例(75%)が母乳栄養のまま、2例(25%)が混合栄養になり、人工栄養はなかった。今回は退院時母乳栄養であった15例のうち1カ月後に13例(87%)が母乳栄養のまま、1例(7%)が混合栄養に、1例(7%)が人工栄養に移行した。又前回は退院時混合栄養であった4例のうち、2例(50%)が母乳に、1例(25%)が混合栄養のまま、1例(25%)が人工栄養に移行した。今回は退院時の混合栄養が4例でそのうち2例(50%)が母乳に、1例(25%)が混合栄養のまま、1例(25%)が人工栄養に移行した。又人工栄養になったものは、前回1例も無かったが、今回は退院時1例ですっと人工栄養を続けた。即ち、初産婦においては、前回に比し退院1カ月後における母乳栄養の維持率が高く、又前回同様混合栄養から母乳栄養に移行する者が50%あったことになる(図5)。

次に経産婦について退院1カ月後の栄養法の定着率を前回の調査と比較してみた。前回は、退院時母乳栄養であった11例中10例(90.9%)が母乳を続け、混合栄養に移行したのが1例(9.1%)であった。今回は、退院時17例の母乳栄養が1カ月後14例(82%)となり、3例(18%)が混合栄養に移行した。又前回は退院時混合栄養であった4例のうち、1例(25%)が母乳栄養に、1例(25%)が混合栄養のまま、2例(50%)が人工栄養に移行した。今回は退院時混合栄養が3例で、そのうち2例(66%)が混合栄養のまま、1例(33%)が人工栄養に移行した。人工栄養は、前回、今回とも1例も無かった。即ち、経産婦においては、今回は前回より母乳栄養定着率が低かった。又前回に見られた、混合栄養から母乳栄養への移行も、今回は見られなかった(図6)。

以上のように、我々の行なった母乳栄養確立への授助指導は、人工栄養を減少させ、特に初産婦における母乳栄養定着率の向上、及び母乳栄養への移行を促す役割を果たしたものである。

以上の成績より

- (1) 退院時1回直接授乳量40ml以上の時は、母乳栄養確立が容易であると考えられる。
- (2) 褥婦への授助指導によって、母乳栄養の確立を推進し、維持できるとともに、人工栄養・混合栄養の率を下げるができる。

- (3) 褥婦への援助指導は、初回分娩時から行なうことが必要である。
- (4) 経産婦の母乳定着率の向上を妨げる因子について、今後詳細に検討する必要がある。
- (5) 1回直接授乳量40ml以下の褥婦の解析が必要であると思われる。

図2 退院時及び1カ月後の栄養法

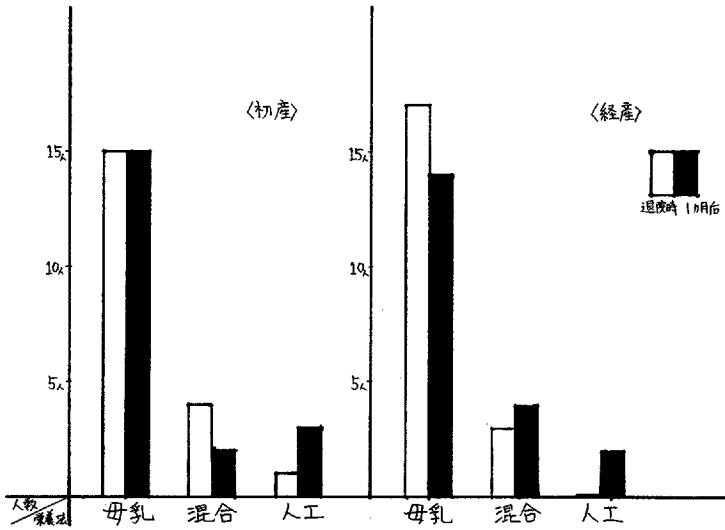


図3 初産の退院時の栄養法の前回との比較

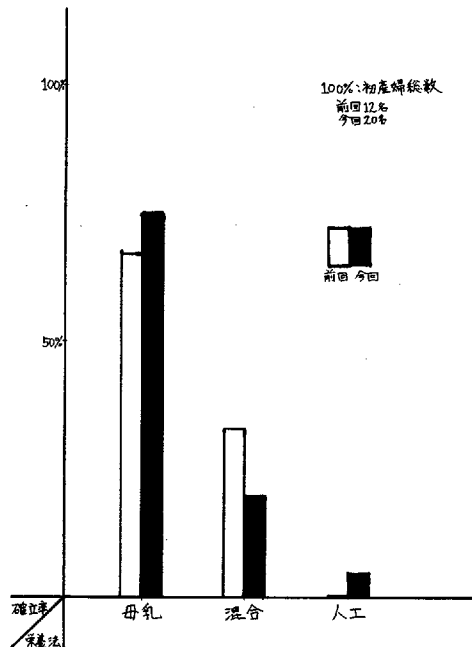


図4 経産の退院時の栄養法の前回との比較

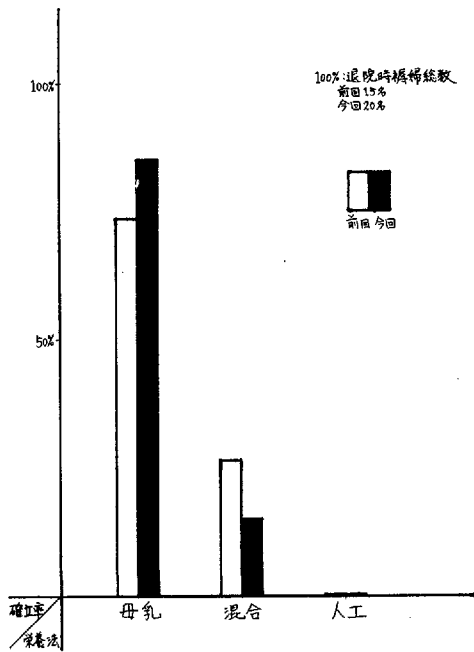


図5 初産の栄養法の定着率の前回との比較

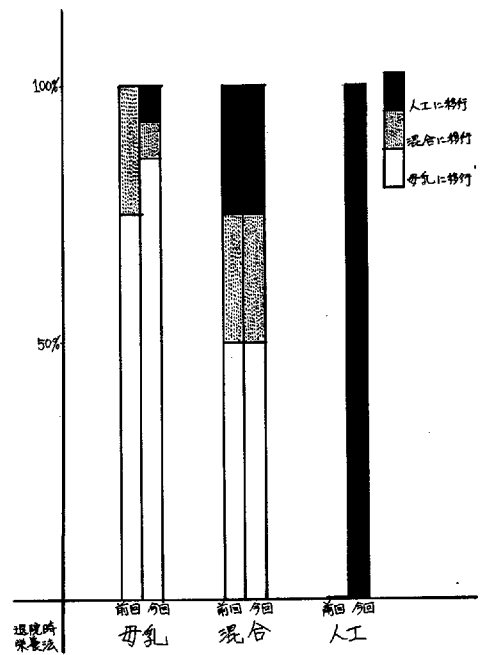
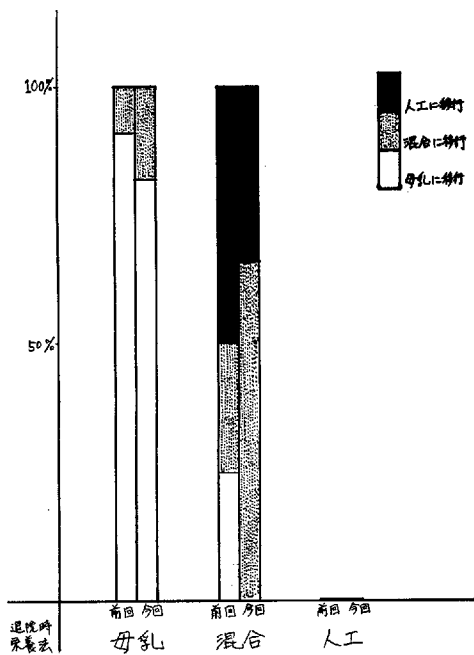


図6 経産の栄養法の定着率の前回との比較



↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

母乳は元来、新生児にとって最良かつ最適の栄養であることはいうまでもないが、一時期、母乳の価値の認識不足、粉乳の発達、簡便性、過信、母乳に含有される化学物質への危惧等によって、母乳哺育に対する積極性が低下した。

しかし、近年に至り新生児に於ける母乳栄養の意義が再認識され、幾多の施設に於いて、母乳栄養確立の試みがなされ、その結果、免疫、感染、精神的な面に於ける、基礎的に重要な事実が指摘され、その優秀性が新しい観点から認められてきた。